



自著紹介

『シェイクスピア劇の道化』

(英宝社、2014年4月)

西野義彰

(島根大学法文学部言語文化学科教授)

W. シェイクスピアはイギリスを代表する劇作家で、生涯に37作品を書いたと言われる。同時代の優れた劇作家としてC. マーローやB. ジョンソンなどが挙げられるが、彼らは主に悲劇又は喜劇という一つのジャンルで才能を発揮したのに対して、シェイクスピアは歴史劇、喜劇、悲劇、及びロマンス劇の四つのジャンルで優れた作品をいくつも書いたので偉大な劇作家と評価されている。彼は様々な言葉や技法を駆使して人間の本质や人生の実相を鋭く捉えるとともに、王侯貴族から社会の底辺に生きる人々まで、多様で個性豊かな人物たちを創造し劇の中で活躍させた。

シェイクスピアの劇には魅力的な主人公がたくさん登場する。他方で、冷酷非情な悪党から温厚で心優しい善人、教養や分別に欠け愚かな言動で笑いを誘う人物まで、様々な

脇役が登場し劇世界を豊かにしている。筆者はこれらの脇役の中で笑いとユーモアに接点を持つ滑稽な人物たちに関心を持ち、道化という視点から彼らの特徴と劇における役割について考察した。本書で「道化」という言葉を最もよく用いているが、それは「阿呆」、「愚者」、「フール」などと交換可能なものとして考えている。シェイクスピアの劇には道化と呼ぶことのできる多様な人物が登場するが、本書で取り上げた道化は、筆者の個人的な好みと、程度の差はあれ彼らの劇における比較的重要な役割という理由で選んだものである。彼らを二つに分類すると、独特の道化服を着た賢い宮廷道化（又はお抱えの道化）と、道化服は着ていないが機知に富み当意即妙の返答で相手を感じさせたり、教養に欠け滑稽で愚かな言動で観客の笑いを誘う道化に分かれる。シェイクスピア

が創造した最大の喜劇的人物サー・ジョン・フォールスタフは後者の代表と言える。

宮廷道化は王侯貴族に雇われ、教養豊かで非常に機知に富む賢明な道化であり、彼らの主な仕事は主人に笑いや娯楽を提供したり、見事な機知問答によって相手の愚かさを指摘し感心させたりすることである。彼らは職業上あえて屈辱的な阿呆の衣服をまとった知恵者なのである。本書では、第4章の道化タッチストーン（『お気に召すまま』）、第5章の道化フェステ（『十二夜』）、第7章のリアの道化（『リア王』）などがこれに相当し、それぞれの特徴について論じた。

歴史劇の『ヘンリー4世』1部・2部に登場するサー・ジョン・フォールスタフは宮廷道化とは全く異なるタイプの道化で、これまでの放蕩生活により脂肪の塊というべき人物である。彼は非常に機知とユーモアに富み、窮地に追い込まれると彼の才能が一際発揮され、巧みに対応して切り抜ける。彼の言葉と行動は非道徳的で自由奔放、我々がやりたくても出来ないことを大胆にやっただけのける。彼はその巨体の中に虚と実、理性と欲望、賢と愚、笑いとユーモアなど様々な要素を内包した複雑

で不可解な人物であるが、本書の第2章で彼を道化という視点から分析し、その尽きない魅力や特徴について考察した。

前述の道化と比べると遥かにマイナーであるが、教養に乏しく愚かで滑稽な言動によって笑いを誘う喜劇における道化として、第1章でボトム（『夏の夜の夢』）、第3章でドグベリ（『から騒ぎ』）を取り上げ、彼らの面白さと特徴について論じた。『夏の夜の夢』にアテネの職人たちが登場し、公爵の結婚祝いに劇中劇を演じることになるが、無器用で猥雑な連中が芝居を演じるために、愉快なドタバタ劇になる。彼らの中で機織りのボトムが一際目立つ存在になっている。他方、ドグベリは愚かな警官として登場し、マラプロピズム（滑稽な言葉の誤用）をくり返し、的外れな事をしばしば話すことで失笑を買う。彼らはいずれの劇においても脇役であるが貴重な存在である。

同じグループに入るが悲劇に登場する道化として、第6章で墓堀り（『ハムレット』）、第8章で門番（『マクベス』）、第9章で田舎者（『アントニーとクレオパトラ』）について考察した。彼らに共通するのはコミック・リリーフ（喜劇的息抜き）

で、それまでの悲劇的な出来事により観客の心に鬱積した極度の緊張を解きほぐすことが彼らの主たる役割である。彼らの登場と台詞の量は大きく限定されているが、各々がそれぞれの立場で洒落や冗談を言ったりたわいないことを話す。また、彼らは無意識に主人公の生き様や劇の中心主題に関係することを語る。この意味で、それぞれの場面が劇に有機的に組み込まれていて、単なるコミック・リリーフの域を超えていると言える。

ロマンス劇では『冬物語』の道化(羊飼いの息子)に注目し、第10章でその特徴について考察した。彼もさほど教養は無く、純朴で心優しい人物であるが、愚かで滑稽な言動によって観客に笑いを提供し、喜劇的な側面に貴重な貢献をしている。彼

の台詞の量と登場の回数は前述の3人よりも多い。また、彼の場合、父親とともに筋の展開に大きく関わるよう設定されていることも特徴と言える。

最後の補遺では、道化の言葉というテーマで、タイプの異なる2人の道化(賢明な職業道化と粗野で教養のない田舎者)を取り上げ、彼らの言葉における特徴について考察した。全ての道化に共通するが、難しさの一つは、彼らの洒落やマラプロピズムなどを正確に理解することで、自力で分かるのはそれらの一部であり、大部分は使用テキストの注に教わった。他の人物の台詞や文体にも言及しながら、フェステ(前出)とランスロット・ゴボー(『ヴェニス商人』)の言葉における特徴が浮彫になるよう努めた。

